

緑の地球

GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力



鉄鉱石など資源豊富な太行山は乱開発の危険にさらされている

Contents

- 訪日団がやってきます(参加のお誘い) P 2
- 夏のワーキングツアー報告 P 4

2007.9

117

認定特定非営利活動法人 緑の地球ネットワーク

訪日団がやってきます！

交流行事にご参加ください

前回(2002年)から5年、久しぶりの訪日団です。カウンターパートが大同市総工會に変わってからは今回が初めて。そこで、今回は総工會のメンバーが中心になります。もちろん、いつもワーキングツアーがお世話になる大同事務所のメンバーも加わります。なつかしい人たちに再会するチャンスです。報告会や懇親会、また、一般公開のスケジュールなど、みなさんの積極的なご参加をお待ちしています。

【訪日団メンバー】

- 陳金宝 (大同市総工會主席)
- 柴京雲 (〃 副主席)
- 王其軍 (天鎮県総工會主席)
- 史海湘 (大同市開發区総工會主席)
- 施 平 (大同市総工會辦公室主任)
- 武春珍 (綠色地球網絡大同事務所所長)
- 魏生学 (〃 副所長)
- 馬占山 (〃 技術員)
- 王 萍 (〃 通訳)

【スケジュール】

- 10月11日(木) 関西空港到着便で来日。
- 12日(金) *六甲山見学。ホームステイ。
- 13日(土) *報告会、懇親会。
- 14日(日) *大阪観光。
- 15日(月) *春日山見学。
- 16日(火) 大阪市施設視察。
- 17日(水) 協力団体施設見学。GEN事務所視察。
- 18日(木) 東京へ移動。協力団体訪問。



前回訪日団のようす(2002年10月)

19日(金) 協力団体施設見学。
 20日(土) *東京観光&交流、懇親会。
 21日(日) 成田空港から帰国。
 *マークが会員・協力者の方々にもご参加いただけるところです。詳細は次のとおりです。

【10月12日(金) 六甲山見学】

GENの立花吉茂代表の案内で神戸市立森林植物園と再度山の植林地を見学します。再度山へ行く都合上、この日は車で移動しますので、希望者は10月1日までにGEN事務所にご連絡ください。なお、ホームステイ家庭の募集はしておりません。

【10月13日(土) 報告会・懇親会】

○報告会 中国黄土高原における緑化協力(14時30分～16時30分)

- 1) 日中緑化協力の現場から(仮) 武春珍さん(綠色地球網絡大同事務所所長)(予定)同時通訳あり
- 2) 緑化と環境問題 立花吉茂さん(GEN代表・花園大学客員教授)

場所: 大阪市立総合生涯学習センター 第1研修室(大阪駅前第2ビル5階。JR「大阪」駅/「北新地」駅、各線「梅田」駅すぐ)
 参加費: 無料
 ○懇親会(17時～19時)
 場所: 大阪弥生会館(JR「大阪」駅、各線「梅田」駅)
 会費: 5,000円

参加申込みは9月27日までにGEN事務所まで。

【10月14日(日) 交流・観光】

一息いれて、ショッピングや観光を楽しみます。大阪城周辺と大阪ミナミがメインコース。別コースも検討中です。同行希望の方は10月5日までにGEN事務所まで。ボランティア通訳歓迎。

【10月15日(月) 春日山見学】

GENの前中久行顧問(大阪府立大学大学院教授)の案内で奈良の春日山原生林を見学します。同行希望の方は10月5日までにGEN事務所まで。

【10月20日(土) 東京交流・懇親会】

東京でGEN会員や協力者と交流し、親交をふかめます。東京を案内するボランティアを募集しています。夕方には懇親会も。

○懇親会(17時～19時)

場所: 三幸園(神田神保町すずらん通り)
 会費: 5,000円

参加希望者はGEN事務所までご連絡ください。締切は同封のチラシをご参照ください。

ワーキングツアーが訪れる大同ではいつもとても親切なもてなしを受けています。その分、この機会にしっかりお返ししましょう。一般参加OKの日には、通訳ボランティア・付き添いボランティアを歓迎します。また、懇親会のときに、踊りや演奏などを披露していただける方も大募集! 参加申込み、そのほか大阪や東京のみどころのご提案などありましたらお気軽にGEN事務所までご連絡ください。電話06-6576-6181、FAX06-6576-6182、e-mail gentree@s4.dion.ne.jp まで。





いまあぐできる GEN への協力

■会員になってください!

まだ会員になっていない方、ぜひ会員になって GEN の活動をささえてください。また、環境問題や国際協力に関心をお持ちの知り合いに、会報の購読などをすすめてください。

■みみずく基金にご協力ください!

1口1万円で寄付を募っています。A. 環境林センター、B. 霊丘自然植物園、C. 白登苗圃、D. かけはしの森の4つからお選びください。指定のない場合は、事務局で決めさせていただきます。

■カササギの森に参加してください!

1ha 分5万円を1口として寄付を募っています。落葉広葉樹や花木も植えられ、植栽完了間近となりましたが、早魃のため07年の植栽結果が思わしくありません。もうしばらくの間、実験林場“カササギの森”に参加していただくチャンスがあります。

■緑化基金、運営カンパもとむ

金額はいくらでもけっこうです。GEN への寄付は、税制上の優遇措置の対象となります。みなさんの応援をお願いします。

*みみずく基金、カササギの森、緑化基金の20%は事務管理費になります。

■ビデオ『よみがえる森』ご購入を!

沙漠化、水不足など黄土高原の環境問題と GEN の緑化協力を30分に

まとめました。価格は5,000円、GEN 会員価格は4,000円(送料別途)です。教材にも好適。小学校高学年から。

■絵はがき『中国・黄土高原』

橋本紘二さんの写真で制作しました。『春』『夏』『秋・冬』『緑化』の4種類、それぞれカラー8枚組、1セット(8枚)300円(送料別途)です。

■古切手を集めています

普通切手、記念切手、外国切手なんでもOK。周囲を1cmほど残して切り取ってお送りください。

■書き損じはがきを集めています

書き損じはがき、古い未使用のはがきを回収しています。通信費にあてています。

■外国コイン・商品券などを集めています

使うあてのない図書券、文具券、各種商品券、外国コインがありましたらお送りください。

■出版物を購入してください

『ぼくらの村にアンズが実ったー中国緑化協力の10年』高見邦雄著/日本経済新聞社/本体1,600円(GENでは1,600円+郵送料290円(1冊)で取り扱っています)

『雁棲塞北』(『ぼくらの村に…』中国語版)高見邦雄著/李建華・王黎傑訳/中国国際文化出版公司/GEN事務局にご注文ください。1冊1,000円

+ 郵送料290円でお送りします。

『中国黄土高原～砂漠化する大地と人びと』橋本紘二写真集/東方出版/本体6,000円(GENでは送料込み6,000円で取り扱っています)

■ボランティア募集

会報発送や事務所の手伝いなどのボランティアを随時募集しています。ボランティア可能な曜日、時間帯をご連絡ください。来ていただきたいときに GEN 事務局から連絡します。

* * * * *

【GEN は認定 NPO 法人です】

なお、2005年6月から国税庁から認定 NPO 法人の認定を受け、今年6月からは第2期目の認定が決まりました。GEN への寄附金は寄付金控除の対象となります。個人の場合は「寄付金額-5,000円」を所得金額から控除することができます。法人の場合は損金に算入することができます。相続・遺贈による寄附は相続税の課税対象から除かれます。

GEN の場合寄附金となるのは、緑化基金・運営カンパ・カササギの森協力金・みみずく基金と、会費のうち1口以上の部分・賛助会費から12,000円をひいた金額です。くわしくはお問い合わせください。

本の紹介

『蟻の兵隊』(池谷薫著/新潮社/本体1,400円)

06年夏公開された『蟻の兵隊』は、ドキュメンタリー映画としては異例のロングラン上映となり、数々の賞を受賞した。けれど、日本軍山西省残留問題の背後にわだかまる闇は、100分ほどの映画で描ききれものではない。映画を見た人も、正直、奥村和一さんら老『蟻の兵隊』たちの言動に心をうたれても、残留問題についてはよくわからなかったのが本音ではないだろうか。

池谷監督は映画を世に送り出したあとにも調査を続け、その成果を1冊の本にまとめた。

「このままでは死んでも死にきれない!」80歳を過ぎた老人が一度敗訴してなお、また国を訴えようとしている。何が彼らをそうさせるのか。この本を読んでみてください。

受託事業及び助成金決定

●(独)国際協力機構の草の根技術協力事業(草の根パートナー型)として「太行山脈における多様性のある森林再生事業」に2007年7月1日から3年間で

5000万円の実施が決まりました。

●(独)国土緑化推進機構・緑の募金公募事業として「黄土高原緑化のための苗圃の整備と運営」に今年度190万円の助成金が決定しました。



見えはじめた成果が楽しみ

夏のワーキングツアー日誌から

この夏は、自治労大阪府本部（7/24～29、20名）、GEN（8/1～8、34名）、サントリー労働組合（8/18～22、15名+荏原製作所1名）の3つのツアーと、専門家調査団（8/11～17、7名）が大同を訪れました。今年の大同は、南部の霊丘県をのぞいて厳しい早魃です。そんな大同でのさまざまな体験をご紹介します。

8月1日（水）大阪→北京→大同

北京郊外は北京オリンピックを09年8月にひかえ、道路工事やオリンピック施設の建設ラッシュであった。道路沿いに「盛宏達建材城」等建材の市場らしいものがずーっと続いていた。街路樹は多く、ポプラ、ヤナギ、アンズ、クルミ、ギンドロ等だそう。ヒマワリの群落も咲いていた。（中略）青い空、沈まぬ太陽。陰しく、木のないはげ山。煉瓦造りの家々。大同高原は夏にすれば豊潤な土地のように見える。だが乾燥と凍土で非常に厳しい土地だ。緑化により黄土高原に雨を呼べるようになることを願う。（渡辺康）

8月2日（木）渾源県→霊丘県

大同は、昨年に続き2度目になる。「あれからもう1年経ったのか!？」と感慨深く大同の景色を眺める。高見さんがバスの中で技術移転の難しさについて説明されていたのが印象に残っている。「少人数、オートメーション化を目指す日本の方式をそのまま活用するには無理がある。中国はいかにたくさんの方の労働力を使うかということが至上命題となっているから」。その通りだ。ただ単純に日本の技術を提供するだけでは上手くいかない、現地の人びとの立場に立って、どのような協力ができるか考えることが大事だと感じた。

渾源県呉城村のアンズ果樹園を見学した。アンズは他の農作物に比べ、収穫が大きいだけでなく、アンズの葉は羊のエサに、果肉は乾物や酢の原料に、種の殻は活性炭の材料になるという話を聞き、アンズの木はまさに金のなる木なんだなと思った。（瀬戸口勲）

8月3日（金）霊丘自然植物園

昼食後、いよいよ本格的な植樹作業だ。…と思っていたのだが山はすでに緑なのだ。しかも木を植える時期でもないの、記念植樹をした。穴は掘ってあり、苗木を入れて土をかぶせるだけで終わった。5本程植えた。私はか



植物園の急斜面で植樹。足下注意!

なりかん違いをしていたようだ。「木のはえていない山や砂地に植樹する」ツアーだと思いこんでいたのだ。実際は「木のはえていない山や砂地に植樹して緑化した所を見学する」ツアーだった。（中略）農家民泊の日だ。公安の先導で村に入り、小学生の音楽隊がお出迎え。バスを降りると村人総出の歓迎だった。むむ…。自分の中で違和感が…。（中略）自分は、この村に何もしていない。村をあげて歓迎されるおほえがないのだ。GENの今までの活動が歓迎されているのであって、ツアーでひょっこり現れた自分が歓迎されるのは、うしろめたかった。この後もこの気持ちをひきずってしまった。（中略）土質や木の研究、調査、植樹、管理など土地の人と協力してきた結果、ここにいられるのだと思った。「自分が木を植えて黄砂を止めてやろう!」とうかつにも思った事ははずかしかった。そんなにあまくはないのだ。ねるまでの間、そんな事が頭をぐるぐる巡っていた。（松山啓志）

8月4日（土）霊丘県上北泉村

農家でホームステイをした。初めての中国の農村で迎える朝だった。家は考えたよりもずっと広く、日本人4人がゆっくりと寝られるスペースを用意してくれた。先生方の話によると中国の普通の農家に比べずっと裕福な家ということだ。（中略）小学校付属果樹園は広大だ。豊かになることができた農村の子どもたちは大学に進む人も多くなり、工学部などに進むことが多いと

聞いた。けれど私は農学を勉強する学生が増えてほしいと思う。大学に進まなくても、村で、アンズの生産を盛んにしてほしいと思う。（佐舗宣行）

8月5日（日）白登、采涼山、カササギ

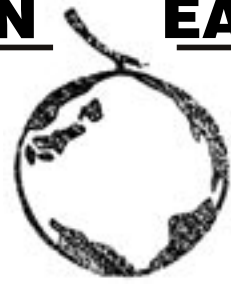
白登苗圃では昼食後、責任者の武さんから話を聞いた。仕事に対する責任感と誇りを感じた。その後、かけはしの森を見学。GENのプロジェクトが、現地での自立を見据えて展開されていることが確認できた。これは大切だ。

昼下がりに、采涼山地球環境林を見学した。困難な場所で緑化を成功させるための数々の工夫を知り、驚いた。成功に至るまでの試行錯誤は大変なものだっただろう。その後カササギの森も見学。今はまだ草原のような相観だが、森になった暁には、ここにまた来て花見をしたいなあ。それまで50～60年かかるだろうか。私はひょっとしたらまだ生きているかも知れない。

このツアーは、GENのプロジェクトの現場を見て学べたことに加えて、日本と異なる文化と接することができたうえ、全く違う年代・立場の方々と接することができ、大変貴重な経験となった。大同で植えた苗木のように、私も今回のツアーで得たものを大切に育てていけたら、と思う。（大原壮王）

8月6日（月）雲崗、環境林センター

そのあと、環境林センターの「苗ばたけ」を見て廻りました。これは、私にとってはすごい収穫でした。今日まで見てきた「白登苗圃」や「カササギの森」などの植林活動のなかで、GENが最初に手がけたのが「環境林センター」だと聞きましたが、ここの色んな樹木や苗木の育ち方をみたら、今までの皆さんの活動はもう実りの時が近いのではないかな、と思わせるような「なにか」を感じました。（中略）センターを歩いて苗の育ちを見ていたら、ここの苗がどんどん売れるようになれば、未来が開けていくに違いないと感じまし



た。初めてツアーに参加した者がおこがましいことを言うようですが、約15年の活動の集大成がここに結実しているのではないかと思います。また、「かさざぎ」が何羽か、苗圃に来ているのを見たのは幸せでした。(橋谷勇治)

8月7日(火) 北京

北京の裕福な人びとの生活と、大同の呉城村の人びとのくらしの違いを目の当たりにし、本当に同じ中国の人なのだろうか、その差の大きさに驚きとショックを感じた。

「文明の前には森があり、文明のあとには砂漠が残る」という高見さんの言葉が実感として強く残った。また、「緑化活動が成功するには、植樹より、その後の管理のあり方が大切である」とも聞いた。木が大地にしっかり根をはり、真っすぐ、力強く生育していくには、木を大切に見守り、根気よく世話していく人の存在がなくてはならないことを知った。(中略) 白登苗圃やかけはしの森や環境林センター等での、木・

自然を愛する人たちの何年間も続いている努力・思いを感じた。

まだまだ書ききれないほどたくさんを知ることができた。

知ることから、足を踏み入れることからスタートなのだろう。ツアーに参加してよかった。(松本博美)

8月8日(水) 北京から帰国

私は2001年春このツアーに参加して、今回が10回目であるが、最初の年に植えた樹木の「苗」には何となく愛着がある。自然植物園で植えた「コノテガシワ」。根がからからに乾き、北風に吹き晒され、石ころだらけの熱灰のようなひからびた山の急斜面。これが活着するなど思いもよらず、ただ、何となく鋤を打ち込み穴を掘って、頼りない苗を植えた記憶が鮮明だ。

今回、皆さんが登山されたとき単身その場所を訪れてみた。なんと、そこにはコノテガシワが何十本も生き付いて、背伸びしているではありませんか。あの10cmそこそこの苗が、大きいもの

は私の背丈を越し、別のものは腰くらいまで伸びていた。しかも、01年春には山には草木が殆ど生えていませんでしたが、今は、草も木も伸び放題でした。

カササギの森も開所式に参加し、記念植樹しました。采涼山プロジェクトでも2002年8月に植えたマツが私の背丈を超えました。

黄土高原の現状はこの程度のことに一喜一憂するほど単純でないことは一応は理解しているつもりですが、一参加者としては10回目を動機づけとなる誘引になったことは否めない事実です。

私たちのプロジェクトは元より、世界各地で施行されている緑化プロジェクトが、どんな理由でも成功することを祈願してやみません。(石原務)

長い時間をこえて成果を

奥村 敏弘

(大阪市学校職員労働組合)

今回、はじめて中国・黄土高原緑化協力事業に参加しました。これまで地球規模での温暖化など環境の悪化についてニュースで知るだけでしたが、このたびの緑化事業に参加し、マツやアンズを植樹することで緑化事業のもつ重要性に気づかされました。特に采涼山プロジェクトにおいて、以前は地肌がむき出しだったという場所が植樹したマツの成長で緑に覆われている姿を見て、その膨大なコストと時間に啞然としながらも、着実な成果を見せる緑化に目の覚める思いがしました。

今回の緑化事業で特に印象に残った



のは、天鎮県南河堡郷東沙河村でのホームステイです。鮮やかな茶色の道、その道を塞ぐようにして横たわる牛、端が見えないくらいの広大なトウモロコシ畑、夕暮れ時ゆっくりと自転車で行きかう村人など日本の喧騒からは別世界ともいえる村で、私が泊めていただいたのは楊さんのお宅でした。はじめは言葉が通じず、いささか緊張気味だったのが、手ずからコップにお茶をいれてもてなしてくれる楊さんの優しさに触れ、すっかりくつろいでしまいました。

夜は星がきれいに見えるという話を聞いていたので、村人たちが寄り集まっている往来へ出て夜空を眺めていると、楊さんはじめ近所の人たちがあれこれ世話を焼いてくれました。近所の人たちがそれぞれの家に戻ってからなおもその場にいると、楊さんがそっとそばに座って、語りかけるでもなくただ2人でぼんやり空を見つめていました。わかりあえるというにはほど遠い交流でしたが、楊さんの優しさに甘えたきりの1日となりました。

この楊さんに代表されるように、中国の方々は皆親切で、なるほど

この人たちが団結して取り組めば、緑化にかかる長い長い時間も越えて、成果がだせるはずだと深く思いました。

同じアジアに住む人間の1人として、今回のような取り組みがあれば、また積極的に参加していきたいと思っています。

中国の「いま」に触れた旅

林 広貴

(サントリー労働組合)

いつの日か必ずこのセミナーには参加したいと思っていましたが、これまでは機会に恵まれませんでした。しかし労組専従5年目の今年、委員長就任をいいことに職権乱用(?)してようやく参加することができました。これまで過去に参加したメンバーから話をたくさん聞いており、行く前から勝手な想像ばかりが膨らんでいましたが、実際に行って体感してみると、そのギャップに驚かされるばかりです。

大同の町は、どこが車線かわからなくなるぐらいの自動車や自転車、夜になると飲食店や屋台で過ごすたくさん



村長さんと握手をする林さん(右)

の人々など、本当に活気にあふれていました。また、今年ウォルマートが進出するなど、地方都市の名残と変わりゆく中国が同居する瞬間を肌で感じました。一方で、農村は大同の市内と比較にならないほど、また想像以上に質素な暮らしぶりでした。特に今年は旱魃がひどく、農作物もほとんどが育たないうちに枯れてしまう状況でしたが、村人たちはそんな中でもたくましく生きていくように感じました。とく

に子どもたちの笑顔やその純粹さにふれ、逆に普段は何気ない小さなことで腹を立てたり、困ったりしている自分に気付かされたような気もしました。また、過去この周辺地域は特に反日感情が強く、最初の頃は大変なご苦勞もあったと聞いていましたが、私たちが小学校で記念植樹をした際には、多くの農村の方が集い、話しかけてくれました。これはこれまでGENの皆さんが活動をされてきたことの積み重ねであることを強く実感した瞬間でもありました。これだけ文化や風土の違う困難の中で、どのように活動を成し遂げてこられたのか、ということを高見さんに尋ねたところ、「日本人の私が現地と同化しようと思っても絶対に最後に越えられないものがあるからね。だからこそ、『異質なものとして交じる』ことで、化学作用を起こしていくような気持ちでやってきました」とおっしゃっ

たことがとても心に残りました。

こうした貴重な体験ができたことはもちろんのこと、「水と生きる」「人と自然と響きあう」を企業理念として掲げるサントリーとしては、例年に違わず「お酒を通じた交流」も積極的に行い、兎にも角にも「カンペー」し尽くした旅でもありました。毎年嵐のように現れ、去っていくサントリー労働組合の一团ですが、これに懲りず、今後もよろしくお願いたします。

最後になりましたが、サントリー労働組合としてこれまで9回もこのツアーを続けることができたのも、ひとえに高見さんをはじめ、現地のスタッフの皆さん、更にはツアー全体を通してお世話になった全ての方のお陰だと思えます。感謝の意をこめて、御礼を申し上げます。本当にありがとうございます。ありがとうございました。

それでは、「再見！」

植物屋のこぼれ話 (続編) その15

立花 吉茂 (GEN代表・花園大学客員教授)

●環境問題の間違い情報

「リサイクルしてはいけない」という本に続いて「環境問題はなぜウソがまかり通るのか」という本が、同じ著者(武田邦彦)によって出版された[洋泉社、2007年3月]。どちらもショッキングな内容である。環境問題は難しいから、その道の専門家でないで断言できないが、一般に本当と思い込んでいることを見事にウソと断じている。いわく、南極の氷が融けて海水面が上昇しているのではない、ダイオキシンは猛毒ではない、森林は二酸化炭素を吸収してくれない、などなどである。私は化学や物理学は素人同然だから、反論も賛成もしがたい面が多いが、読んでいくうちに「なるほど」と思うようになってから不思議だ。それは、私の専門分野の植物についての間違い報道があまりにも多いので、他の分野も同じなのだろう、と推測するからである。

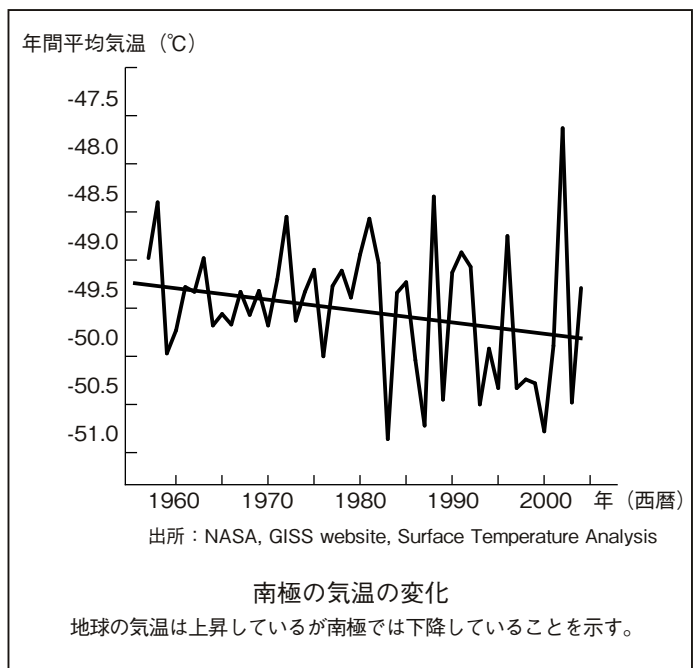
●植物界の間違い情報

最近うわさが消えたが20年あまり前、セイトカアワダチソウが花粉症の原因だと騒がれたことがあった。「そんな

ことは絶対はない」と私たちが言い続けていたがマスコミがでっちあげてしまった。私は「これは情報公害だ」と言い続けた。「30年もすればこんな話も消えちゃうよ」と言った通りになりつつある。「キョウチクトウが花粉症の元凶だ」と騒がれたのも同じころのことである。キョウチクトウは花粉がほとんどないか、あっても飛ばないからめったに種子ができない。スギやヒノキは裸子植物だから花粉をふんだんにバラまく。裸子植物は昆虫も鳥もない時代からの植物だから風に頼っているのである。

「ヨシが水を浄化する」話はウソではないが、汚染

物質の流入量に比べれば期待できるほどの浄化力はない。マスコミはいまだに過大評価しているから不思議だ。「砂漠緑化でユートピアができる」もあまり根拠のない話である。砂漠地帯と砂漠化地帯は根本的に違うからである。緑の地球ネットワークは砂漠化地帯の緑化活動をやっているのである。最近言葉の定義があいまいになった。これが間違いの根源であろう。



黄土高原史話〈36〉

後漢時代の高柳県

今夏予定していたワーキングツアーは、結局実現できず。GENで計画した日程だと、まだ前期末の試験中。自由に設定できる弊学単独のツアーは、04・06両年と実施したものの、今回は学生の応募者が少なく、中止のやむなきに。植林活動のあと、陽高県・天鎮県あたりの遺跡を探訪し、その知見を本稿に生かそうと目論んでいたのだが…。

具体的には、<34>の古城堡漢墓群、<35>の代郡西部都尉の項をうけ、当該の地、つまり高柳県のその後の運命を述べようかと。やむをえず、文献にもとづき、多少推測もまじえつつ。

まず、『漢書』五行志に、
「景帝の中三年〔B.C.154〕秋、蝗あり。これよりさき匈奴、辺を寇し、中尉〔魏〕不害、車騎材官の士を將いて、代の高柳に屯す。」

景帝初年、高柳には騎射の武卒が駐屯し、匈奴に対する砦をきざずく。そのあと地理志にあるごとく、代郡西部都尉の治所となったわけ。

古城堡漢墓群の存在は別として、前漢時代、高柳についての記録はこの二件のみ。

ところが後漢に入ると、俄然その名は頻出する。

ここに一人の漢人あり、名を盧芳と

谷口 義介（摂南大学教授）

いう。武帝の曾孫と称するが、もとよりアヤシイ。王莽（B.C.45～A.D.23）篡奪の混乱に乗じ、匈奴の支援もとりつけて、五原郡九原県に独立し、朔方・雲中・定襄・雁門の諸郡を収め、それぞれ守令を任命する。

「このとき盧芳、匈奴・烏桓と兵を連ね、寇盗もつともしばしばなり。縁辺愁い苦しむ。」（『後漢書』王覇伝）

かかる情勢下、成立まもない後漢では、A.D.30年、代郡太守の劉興が郡治の桑乾より出撃し、盧芳の部将賈覽を高柳に攻めるも、あえなく敗死。つまり代郡高柳は、このころ盧芳の勢力下にあったわけ。とんで33年には、大司馬の呉漢・捕虜將軍の王覇らが再攻撃をしかけるが、望み果たせず返り討ち。しかし翌年、呉漢・王覇ら、兵6万で賈覽を破り、高柳奪回に成功する。

しかるに高柳攻防戦と並行して、後漢政府は33年、雁門の吏人を太原に移し、34年には定襄郡を省いてその民を移住させたほか、39年、雁門・代・上谷3郡の民6万を常山・居庸両関以東に移している。これすなわち、匈奴と盧芳の圧迫を

受け、北辺諸郡の維持が不可能になったことを物語る。

ところが『後漢書』馬援伝にいう。

「明年〔建武二十一年、A.D.45〕秋、〔馬〕援すなわち三千騎を將いて高柳を出で、雁門・代郡・上谷の障塞を行く。烏桓の候者、漢軍の至るを見て、虜ついに散去す。」

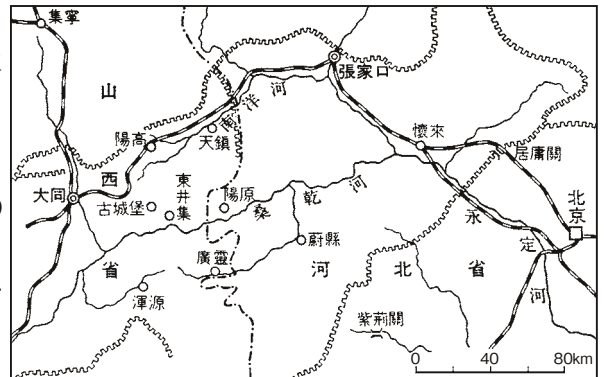
すなわち高柳は、後漢北辺の基地として、孤塁をまもっていたわけだ。

後漢にとっては幸いにも、匈奴は南・北に分裂し、盧芳も匈奴のなかに死す。これを機に南単于の投降を許し、内郡に移した漢人も故地に戻して住まわすが、かつてのごとき郡県統治にはほど遠く、一種の緩衝地帯ができたのみ。

高柳に限っていうならば、それまでの桑乾に替って代郡の郡治に昇格する。

しかし後漢のあと、鮮卑南下の激動の時代、いかなる運命が待ちうけていたか。

いま地図に、高柳の名はありません。



ゆのり この人

稲葉 忠次さん（栃木県）

「日本語ボランティア」が、定年後の5年目を迎えるようとしていた時、友好都市の中国・紹興市の越秀外国語学院から声がかかり、思わぬ経験をすることになりました。日本語教師のボランティアの誘いです。

躊躇しながらも、生来の好奇心も手伝って3月末に紹興市にやってきました。

塾の教師が専門学校の教師に昇格したようなものと思って気楽に構えたものの、言葉のわからない環境では、授



教え子たちと教室で記念撮影

業を進めるにつれ、かなりの重荷となってきました。日本人教師仲間は8人、私以外は高校教師などを長年務めたベテランですからそれなりの下地はあったでしょうが、なにせ私は全くの素人。

先輩たちの指導と慰めとのお陰で何とか教師役を始めることになりました。3ヶ月やってみると先生役の喜びも悲しみもだんだんわかるようになり、先生

の幸せは、生徒たちによってだいぶん左右されることが実感でき、自分の学生時代を懐かしみ反省もしたものです。

無給のボランティアとしては、できるだけ生活費を切り詰める必要があり、旅行と違っていきなり庶民の生活に入りました。中国と日本の世相の違いには、びっくりするやら腹がたつやら、毎日が試練との戦いでした。日本に来た外国人もこうやって苦勞しているんだなど、今更ながら、国内での日本語教室の生徒達に同情したものです。

華北と違い雨の多い長江デルタ地帯。大同とは全く違う気象条件です。こんなに広い中国を、ひとつの基準で生活していくのは土台無理な感じがします。

情報ひろば
いっしょなかたち

第2回「人と環境にやさしい
交通をめざす全国大会」
京の環境と観光そして交通を考える

- 日時：9月22日（土）14時～17時30分
- 場所：同志社大学室町キャンパス寒梅館大ホール（地下鉄烏丸線「今出川」駅1分。上京区上立売通室町西入御所八幡町103 Tel. 075-251-3120）
- 参加費：無料
- 基調報告「『歩くまち・京都』の実現に向けて」大島仁さん（京都市都市計画局局长）／「LRTが富山を変えた」笠原勤さん（富山市副市長）
- 市民からの提言
- 主催：「人と環境にやさしい交通をめざす全国大会」実行委員会（<http://www.areev.org/>）

熊森シンポジウム in 東京
クマの棲む豊かな森を次世代へ
シンポジウムでは行政、被害農家、

*当欄掲載のイベント情報は掲載時点のもので、その後変更になる可能性があります。主催者にお確かめのうえ、ご参加ください。
*当欄に情報をお寄せください。本紙は奇数月15日ごろの発行で、締切は前月の末です。なお、紙面の都合により掲載できない場合があります。ご了承ください。

研究者、猟友会、自然保護団体それぞれの声が聞けます。

- 日時：9月22日（土）13時～17時30分
- 場所：東京大学農学部弥生講堂（文京区弥生1-1-1 地下鉄南北線「東大前」駅徒歩1分、千代田線「根津」駅徒歩8分）
- 参加費：無料
- 講演「正しい原因の特定が、解決への道」森山まり子さん（日本熊森協会会長）
「クマと森、カナダでは」マルコム・フィッツアールさん（カピラノ大学教授・京都大学客員教授）
- シンポジウム
- 総合討論「野生鳥獣を殺さない国への転換」
- 主催：日本熊森協会（〒662-0042 兵庫県西宮市分銅町14 Tel. 0798-22-4190 e-mail : jbfa@nifty.com URL <http://homepage2.nifty.com/kumamori/>）

第3回近畿の環境団体情報交流会
情報交流と協働の可能性を求めて

- 日時：9月24日（月・祝）10時～16時10分
- 場所：京都テルサ セミナー室（JR「京都」駅10分。南区東九条下殿田町70番地 Tel. 075-692-3400）
- 参加費：一般1,000円、学生500円
- 基調講演
「川と森を未来につなぐ」姫野雅義さん
- パネルディスカッション
- 分科会 ○全体まとめ
- 主催：近畿環境市民活動相互支援センター（エコネット近畿）／セブン・イレブンみどりの基金
- 問合せ・申込み：〒530-0041 大阪市北区天神橋1-18-11 グラウンドール南森町102 エコネット近畿 Tel/Fax 06-6881-1133 e-mail : econetkinki@minos.ocn.ne.jp URL <http://www17.ocn.ne.jp/~econetkinki/>）